



せかいじゅうの種9

「大人しく、しろって!」

「奢った分だけ楽しませてくれる、約束だろ?」

「そんな約束、して……なッ!?!」

「そうだっけ? お互い酔ってたからなー」



「飲み過ぎでまともに力も入らないだろ。」

「冒険者同士、仲良くしようぜ」

「く、う……やめッ……」

「なに、ここんところ忙しくて抜いてないし、  
すぐすむから、よ！」

「……ひあ、ああッ!?!」

ちゅくんっ

あゝ

んんん

んんん

びんん



「こんな、事して……ただじゃ、すまッ!?!」

「うるせえな。これでも啜えてるよ」

「おら、奥まで穿ってやるよ!」



「そら、酒よりうまいもん出してやる！飲み干せっ！」

「うぶッ!?ふ、うううう~~~~ッ！」

「こっちからも、注いで……やるっ！」



「は、あ……ッ!?なか、に……っ!?!」

「そんな簡単にデキやしねえって」

「ほら、交代交代。うわ、お前のでドロドロじゃねえか」



ムムム

ムムム

+6 +6

ムム

ムム

+6 . 04

ムム

「しゃーない、ケツ穴使うか」

「な、……あああッ!?!」



「ほれ、ケモノみてえに鳴いてないでしゃぶれよ」

「ふぐっ!?ちゅぐ……ん、ぐううッ!?!」

「あんまケツ締めんなって、ちぎれちまうだる」





「んぐ……っ！お、しっ……!?こ……わえ、……ふぶっ!?!」

「ちゃんとしゃぶれって！……あ、でそう……」

「こっちも、だ。上下からご馳走してやるよ」

「ん、んんん~~~~っ!?!」



びしょびしょ

んっ

びしょびしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

「……はっ……、……けほっ！……う、えっ……」

「精液は口に合わなかったか？」

「好きになるまで飲ませてやるからな」

「く……うっ……」



「……あっ……、うあっ！は……あっ……」

「だいぶ腹膨らんできたな」

「簡単にはデキないんじゃないのか？」

「うっせーな。何度もやってりゃそりゃ当たるだろ……」

「ほら、お前はサボってないでケツ穴絞める！」

「はうッ!?……あっ……、うあああっ——」

どゅん

おちゅん

おちゅん

は、は、

は、は、

おちゅん

は、は、

は、は、

おちゅん

END

「お前、たち……何を……っ!?!」

「何って、なあ……?」

「王女様、こんなところに女の子一人でいたら襲って下さい言ってるようなもんだぞ?」

「ましてやこんなやらしー身体じゃこっちも我慢の限界だぜ」

ゴボ

んんん

うわ

んんん

んんん



「まあ、ここまで無事だったんなら  
大した幸運だ、な！」

「あ、ひ……いあッ!?そこ、は……っ！」

「すぐに前にも入れてやっからよ」

あ  
ん

あ  
ん

あ  
ん

あ  
ん

あ  
ん

あ  
ん



「やめ、……はあッ!?……うあっ……あ！」  
「っ……キツいな、あんま使ってないのか?  
……って、未使用かよ」  
「あう……ッ!うごか、ない……でっ……」  
「そいつは無理な話だ、な！」

↑↑↑↑↑

↑↑↑↑↑

↑↑↑↑↑

↑↑↑↑↑

↑↑↑↑↑



「まったくだ。王女様がこんな下品な乳首してたらいかんだろ」

「ひ、……あッ！ほう……あっ……ああ！」

「なんだ？メス穴穿られて感じてんのか」

「……っ!?ち、……がっ……ああっ！」

「はは、この身体じゃチンポ大好きっしょ」

あははは  
あははは

あははは

あははは  
あははは



「や、……えッ、あ……んああッ……はっ♡」

「いい声で鳴くじゃないか、王女様！

そるそる出して、やるぜ」

「……ひっ!?い、……やっ……外に……っ」

「間に合わねえ、な!そら、孕め……えッ!」

「王女様の、ケツ穴に……で、るっ!」

「うあッ!?ふあああああッ!」

Handwritten pink scribbles and arrows pointing towards the girl's face.

Handwritten black scribbles and arrows pointing towards the girl's face.

Handwritten black scribbles and arrows pointing towards the girl's face.

Handwritten pink scribbles and arrows pointing towards the girl's chest.

Handwritten pink scribbles and arrows pointing towards the girl's chest.

Handwritten pink scribbles and arrows pointing towards the girl's chest.

Handwritten pink scribbles and arrows pointing towards the girl's chest.

Large, stylized white text with black outlines, possibly reading 'おっぱい' (breast) and 'おまんこ' (vagina), overlaid on the splashing liquid.





「……ふう、スッキリしたぜ」

「こりゃいい旅の仲間が見つかったな」

「……は、あ……っ、うあ……」

「ほら、休んでんじやねーよ」

「次は俺が王女マンコ堪能させてもらうぜ」

「い……っ!?あ、ああああッ!?!」

んんん

んんん

はっ

んんん

んん

んん

んんん

んんん

んんん

「ほら、ケツ穴気張ってチンポしごかないと挿れっぱなしで閉じなくなっちゃうぞ？」

「はっ……、あ！……ん、あッ……」

「今更手遅れだろ。……じゅっ、じゅるっ！」

へへ、迷宮でミルク飲み放題だぜ」

「……あ、も……、ゆる……、うあっ」

「何？ゆるマンに挿れてほしいってか？」

仕方ねえなあ」

ちゅっ、ちゅるっ、

ほん…

チンポ  
チンポ

は

あ

ん

ん  
ん  
ん



「ちがっ……は!? ああ……、ひああ……ッ！」

「まあ、こうやって牛チチ絞れば、オマンコ  
キュッキュ締め付けてくるしな」

「お、ケツ穴もいい感じだ、ぞ！」

「は……あ！ や……っ!? あ……、ああッ！」

おな、か……ッ！ しんじや、……ああっ!？」

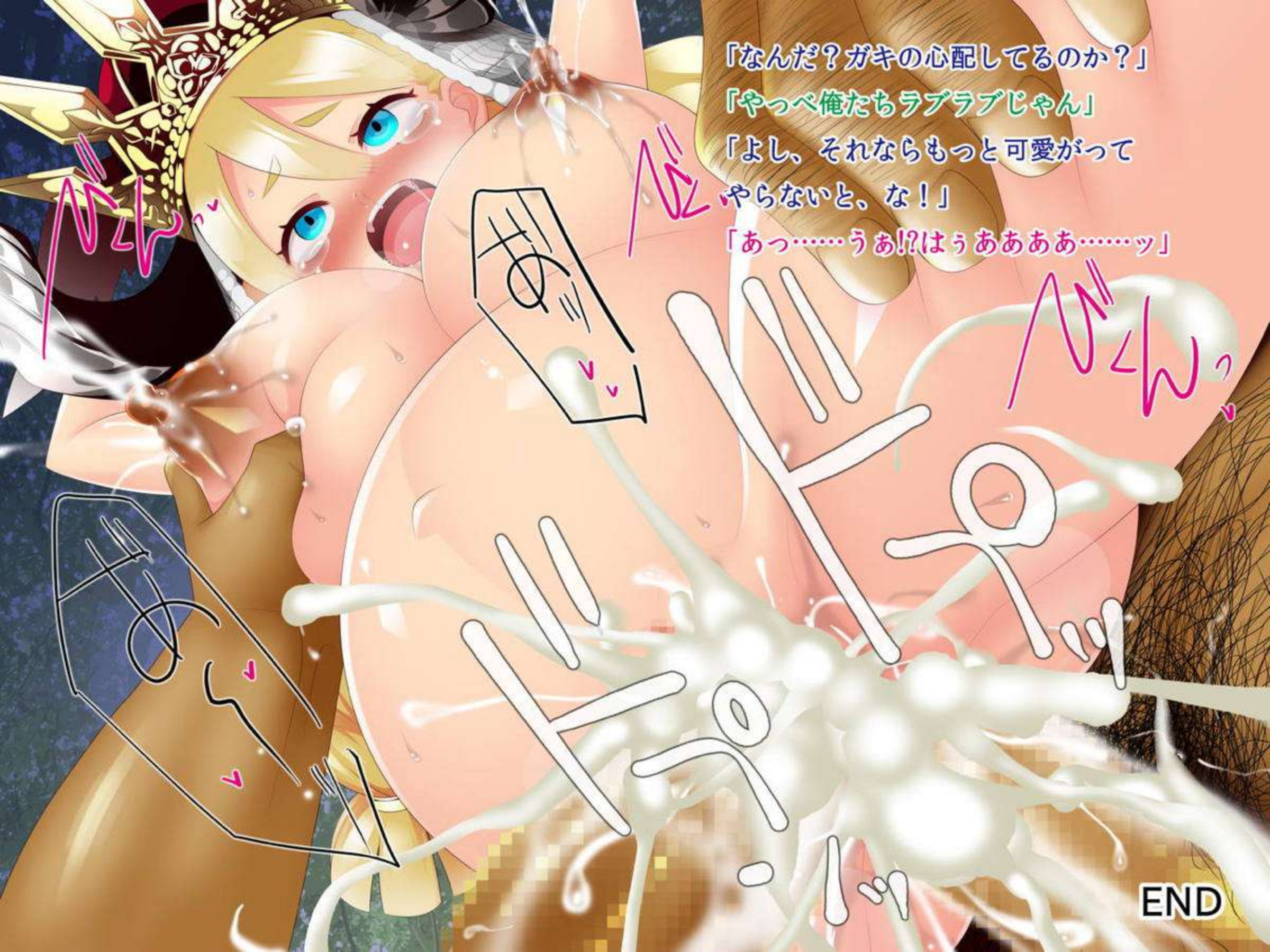
おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ



「なんだ？ガキの心配してるのか？」

「やっべ俺たちラブラブじゃん」

「よし、それならもっと可愛がって

やらないと、な！」

「あっ……うあ!?!はうああああ……ッ」

END

「ちょ……、っと!?冒険者さんたち、しつかり……」

必死の抵抗も虚しく、次々と倒れる冒険者達。

一人残された彼女に、魔物が絡み付く。

「や……だあっ!?このままじゃ、ボクも……!?!」



倒れた仲間たちを目で追ってしまい、死を覚悟した瞬間、失禁してしまう。しかし、何故か魔物の先程までの凶暴は消え、ただ身体を這いずるように舐め回してくるのだった。

「なに……、んんっ!?……どうし、て……?」



疑問に答えてくれるものがあるはずもないが、  
股間に硬いものをあてがわれ、それどころではなくなった。  
「あ……、いやあっ!?!……まさ、か……あうっ!?!」



「い……あああああっ!?!……い、だ……ああっ!?!」

魔物の生殖器はプチプチと肉を掻き分け、  
深々と突き立てられ痛みで叫び声を上げる。  
そして、この行為のために残されたのだと理解した。





「……は、うああッ！……や、あ……はあッ！」

魔物の生殖器に肉壺を抽送され、嬌声を上げる。

破瓜の痛みはいつの間にか失せていた。



は  
う  
ッ

あ  
あ  
ッ

は  
は  
は

ち  
ゅ  
る  
ん

び  
く  
ん

ち  
ゅ  
る

ぱ  
ち  
ゅ  
ん

ぱ  
ち  
ゅ  
ん

ぱ  
ち  
ゅ  
ん

ぱ  
ち  
ゅ  
ん

び  
く  
ん

そして、魔物の生殖器が子宮まで突っ込むと、動きを止めた。

「や、な……に!? いっぱい、出て……えッ!?!」

大量に放精され、収まりきれない液体が溢れ出した。

それを掻き出すように、再び魔物の生殖器が動き出す。

「あ……っ!?! や……動かない、でっ!?! 誰か、たす……うえッ!?!」



悲鳴が、届くことは無かった。

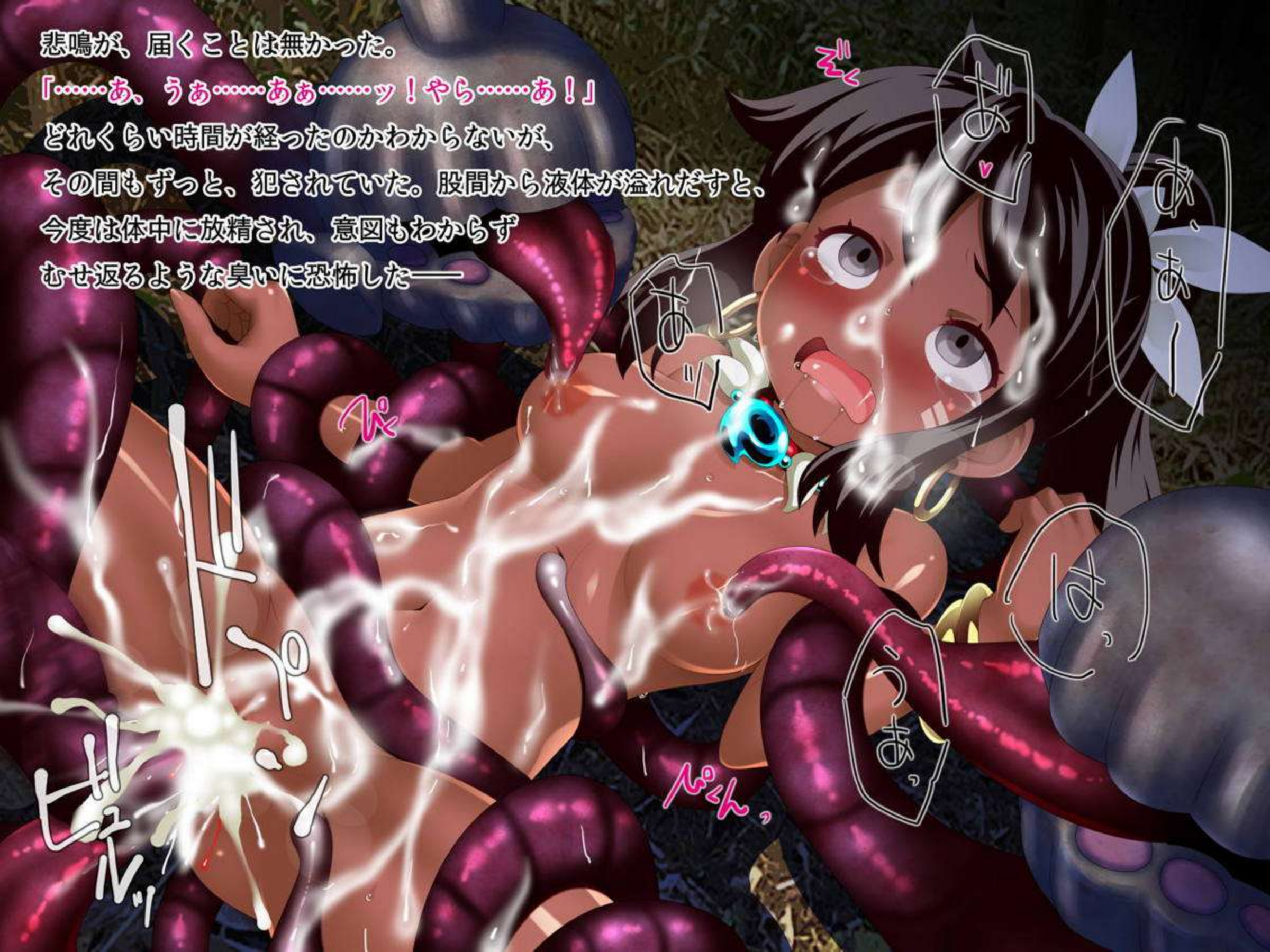
「……あ、うあ……ああ……ッ！やら……あ！」

どれくらい時間が経ったのかわからないが、

その間もずっと、犯されていた。股間から液体が溢れだすと、

今度は体中に放精され、意図もわからず

むせ返るような臭いに恐怖した——



—いつの間にか自分の周りが囲まれていたが、  
それどころではない。四肢は身動きできず、  
なすがままに肛門を穿り返されていた。

「あ……は、あ……あ……ッ！ひ……ぐッ！」

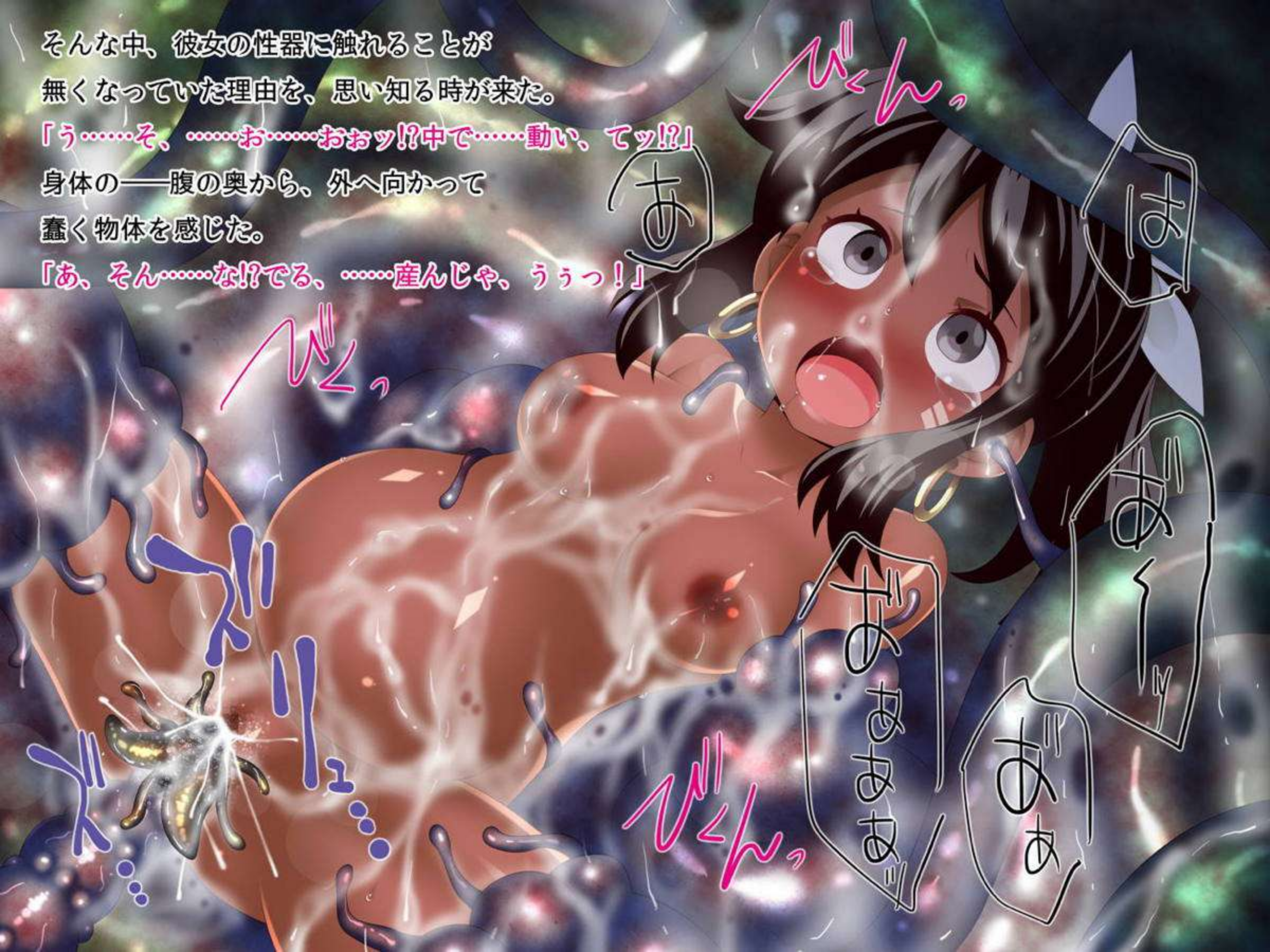


そんな中、彼女の性器に触れることが  
無くなっていた理由を、思い知る時が来た。

「う……そ、……お……おおッ!?中で……動い、てッ!?!」

身体の——腹の奥から、外へ向かって  
蠢く物体を感じた。

「あ、そん……な!?!でる、……産んじや、ううっ!」



「あ……は、まだ、……でりゅ……ッ！……んあ、あああっ♡」

彼女の腹の中から次々と魔物が孵る事に、喜びを感じていた。  
それはきっと、利用価値があるうちは生きていられるのだと、  
殺されることはないと期待したためだろう。

「ふあ……、ま……た、くるッ！ボク……まだ、  
産める、から……！がんばるか、ら……っ！」

誰か、助けに来て。そんな彼女の  
願いが届く日は、来るのだろうか。

END



「あ……、ああ……ッ!?!いや……っ!たす、けっ!?!」

冒険者たちとはぐれてしまい、一人になったところを運悪く魔物に襲われる。どうやら、発情期のように激しくペニスを押し付けてくるのだった。

ズズズズ…



覆いかぶさられながらも、なんとか体を揺らしていたが、  
とうとう彼女の裂け目がペニスに捉えられる。

「あ……!?んあ……っ!私、ちが……、あうっ!?!」





「い……、……ぎっ!?やめ……っ、お腹、さけ……ッ!

あ……は、あぁっ!?し、んじや……うっ!?

魔物の巨大なペニスの形に腹が歪む。

頑丈な冒険者でなければ本当に死んでいたかもしれない。



「ぬ……いて、……うあっ!?だれ、か……き、てっ!!」

膣内でペニスが膨らむのを感じる。射精に近いことを  
普段から動物と親しんでいる彼女は察知し、助けを求めた。

だが、周りに人影は見え、魔物は身体を反転させるのだった。

「あ……いや、あああ……っ!?や……あ、あっ！」

魔物が放精を開始する。いくら足搔いても  
ペニスが抜けることはなく精液が注がれ、  
彼女の身体は妊婦のように膨らんでいくのだった。



「……あ、……は！……ああ、……んあつ」

交尾を終え、満足したのか魔物はいつの間にか去っていたが、腰の抜けた彼女は身動きできず留まっていた。するとそこへ一人の男が駆け寄ってきた――



びくん。

「やめ……で、下さ……あ!? どう……して、こんな……あぁっ!?!」

その男が、汚れた衣服を剥ぎ取りながら下卑た顔で答えた。

「へへ、見てたぜ。魔物とヤッてるってこ。

一回も二回もたいして変わらねえだろ? 俺にもやらせるよ」

「そ、んな……!? あ、いや……! もうやだ……あッ!?!」

ぐぐぐ…

ジュジュ



「おら、ケツ穴の力抜けよ？マンコみたいにガバガバにされたくなかったらな」

「そ……んな、い……ぎいッ!?許し、……ひああッ!?!」

「しかし小せえオツパイだな。お嬢ちゃんいくつ?」

「あ……ッ!?!う、……あっ!ああ……、あ〜〜ッ!」

びしょ.

キュム

ニョムッ  
ニョムッ  
ニョムッ



ズン、

は

あ

あ

あ

ズン、

あ

あ

何か質問されても、それどころではない。

「まいいや、そら、出すぞ！身体の中ザー汁でいっぱいにしてやる！」

「……ああッ!?やだ、や、あああああ~~~~~ッ!!!?」

直腸からも精液を注がれ、2度目の強姦を終える。

「さて、……俺の言うことを聞いたら、街まで連れ帰ってやるぜ？」

彼女の苦難は、始まったばかりだった。

END



「うあ……、あ！寄るな……あッ!?!」

大量のローパーに囲まれ、為す術無く拘束される。

攻撃時に受けた神経毒で、うまく力が入らないせいだった。

そして、触手が衣服を剥ぎ取ると、一際グロテスクな触手が伸びてきた。





「や……、あッ!?うぐ、……挿入って……、えッ!?!」

その触手が前後の肉穴に狙いをつけ、各々突き進む感触を、  
身体は麻痺して動かないのに、実感できてしまった。

「ひっ……い!?!……や、あ……、ああっ……!?!」



そして、膣穴を穿っていた触手が子宮まで到達すると、  
根本から膨らみだした。内部で卵を移送していたからだった。  
「あ……、ああ!?そんな……の、いれ……、ないでっ……!?!」



「うあッ!?……あ、はうっ!ひああ……っ!」

次々と産み付けられ、腹の形が歪んでいくのを見つめる事しか出来ず、絶望する。

しかしいつからか、一つ、また一つと卵が膈壁を擦りあげる快感に、声を上げてしまうのだった。





「な……にッ……!?うそ、……ま、だっ……あッ!?!」

膣穴に卵を産み付けていた触手が、肛門を舐る。

どうやら、まだ終わってはいないようだ。

「やっ……あ!?やめて、……やあああッ!?!」

「……うぐツ……うらッ!?!んんツ……、うらッ!?!」

膣内の卵と、直腸を進む卵が、壁越しにゴツゴツとぶつかり合うのを感じながら、ただ、この行為が終わるのを待っていた――



「……あッ……、……あ！うあ……、は……」

前後の穴を卵に蹂躪されてからは、挿入されることはなかったが、かわりに体中を弄ばれる日々が続いた。胸を遠慮なく揉みしただかれ、尿道をかきほぐし、尻穴を大きく広げられた。



そして、とうとうローパーの幼生が孵りだす。

「あ……が、あッ!?うあああッ!あああッ!」

相変わらず神経毒で麻痺しているのか、さほど痛みはなく、むしろ快感ですらあった。乳首からは母乳が吹き出し、自身が母体に作り変えられたことを自覚した。





「……は、あああッ!? まら、でりゅッ……! う、あ……あ!」

膣穴から、肛門から次々と出産し、絶頂を繰り返す。

ふと顔をあげると、卵を産み付るための、あの触手が視界に入る。

「あ……は♡ま……、た……っ!」

そして英雄は、ただの魔物の産卵場となった。

END

「離し、てっ!……こ、の……ッ!」

巨大な魔物に捕まる。その体躯に見合った握力に未熟な冒険者は逆らう事が出来なかった。

だからといって諦めるつもりはない。

なんとかもがいていると下腹部から鼻を突く異臭が漂ってきた。

「ひ……いッ!?!」

それは勃起した魔物のペニスだった。そして

それを、彼女の性器に擦りつけてくるのだった。



「いやっ、……あ!?んあ……ッ!や、ぬ……」

魔物のペニスが秘裂を捉える。

「うそ、だって……まさ、かッ!?!」

種族も体格も違うのに。彼女のそんな思いは興奮したオスの前にはどうしてもいい事だった。

んんん

あ、あ、あ

あ、あ、あ

んんん

んんん

んんん



そして、魔物のペニスは膣口をこじ開け、  
ずぶずぶと潜り込んでいった。

「~~~~~うッ!?!」

力任せにペニスに串刺しにされ、圧迫感と  
強烈な痛みで、声も出ない。



「あッ!?やえッ……!?う、ご……ああッ!?!」  
腰を振れと言わんばかりに、荒々しく揺すぶられる。  
肉棒が肉壁を強引に擦り上げ、子宮を潰す。  
ただ闇雲にピストン運動を繰り返すその様は、  
交尾と言うにはあまりにも一方的で、その時  
彼女は魔物にとって射精を促すための  
道具だったのかもしれない。

はっ

はっ

ぬぬぬぬ

ドクドク

んんん



突然肉棒が動きを止め、魔物の全身が少し震える。

「い、あああああああッ!?うあああああッ!」

胸を、足を掴む魔物の手に力が入り、

揉み潰されそうになるが、下腹部は

それどころではない。大量の精液に

膣は膨れ上がり、張り裂けそうになっていた。



ゆっくりとペニスが引き抜かれる。だが  
身体に残った大量の精液で、彼女の腹は  
風船のように膨らんでいた。

「……あッ！は、……うあッ」

敏感な秘部を貫かれる激痛から開放され、  
—先ず安堵する。しかし、冷静になって思い出す。  
疑問だったこの行為に、もし意味があるのなら。  
魔物が、自分を殺さないでいる意味が—

たぶん

「ん……じゅるッ！うぐ、……うううッ！」

大木に縛り付けられ、魔物のペニスを吸る

日々が続いた。たまに食事——餌を持ってきては、

口に詰め込まれる。そんな環境でも健在なのは、

冒険者だからなのだろうか。

肉棒の臭いにも慣れた頃には、腹は妊婦のように、

いや妊婦そのものになっていた。







魔物が小さく呻き放精する。

「ぶ、……ぶらッ!ふ、んうう!……んんッ!」

大量の精液を顔面に浴びながら、

腹痛を感じる。食当りか何かと

彼女は思ったかったが、その答えは陣痛だった。

「……あッ!は、……がッ!?あああ……ッ!  
は……、あ!……ま、れ……!うま、れ……ッ!?!」  
痛みに耐えていると、子の頭部が姿を現した。



「ひ……ああッ!?やだ、あ……あッ!?見ない……れッ  
……ふあ、……ああ!れちや……、だ、え……えッ」

力強く、膣から飛び出そうとする様が見え、  
人ではないものを産んでしまった恐るしさに、  
怯える。しかし、これで終わりではなかった。  
子供を引きずり出すと、ペニスを膣にあてがう。

「や、……ああ……っ!?また……ああああッ!?!」  
森に彼女の叫び声が響いた。



END



とび  
とび  
とび

びび

とび  
とび  
とび

びび

「ほら、ウチのギルド入りたいんだろ？」  
「新人の口利いてやるんだ。俺たちを満足させるよ」  
「……あ、の……っ！こんな、試験……  
やっぱり、……おかしいっ」



「いいから、しゃぶれって。わざわざ新米  
拾ってやるんだ。おかしいのは当たり前だろ？」  
「うう……、うえ……ッ!?ま、ず……う」  
「んじゃ、俺から行くぜ」



「……いた!?!いたあ、ああッ!?!う、……ぐすっ  
やっぱり……やだ、あ……ああッ!?!」

「おいおい魔物との戦いはこんなもんじゃねえぞ!」



「あ、うああッ!?は、あ……あぁっ!?!」  
「ちっ、もう奥か。……半分も入ってねえぞ」  
「いだ、い……あ!?ぬ、いて……ひぁっ!?!」  
「痛がってんじゃん、下手糞だなー。ヒールしてやるよ」



「余計な事すんな、よ！おら、……出すぞ！」

「へいへい、早く変われよな」

「ま、……って！中に、は……！ふああああッ!？」

「なに、デキたらそこのメディックのおじさんが  
墮ろしてくれるからよ」





「ふ、……うぶっ!?!げ、ほ……ッ!?!」

「お前俺をなんだと……あ、こらザー汁吐き出すな」

「よし、合格だ。これからも性欲処理がんばれよ」

「……そ、んな……あうっ!?!」



「あ～疲れた。冒険の後はこのふわとろけつまんに癒やされないとなー」

「……あ、あ……っ……、うあっ」

「腹だいぶ大きくなったな。結局墮ろさなかったのか？」



「腹ポテマンコやりてえって、誰かさんが」

「へえ、悪趣味な奴だぜ。おら、マタ開け」

「や……あッ！たす……っ……け、やだあッ！」

「二本差しは初めてだったか？ガキが通りやすいように  
広げてやるから、よ！」

お母さん



「うあ……ひあああッ!?や、こわれ……っ  
おまんこ、こわれ……ちや……ッ!?!」

「お、おおケツ穴絞まる絞まる。食い干切られそうだぜ」  
「ケツぽっかやりすぎなんだよ。もう閉じなくな  
ってたじゃねえか」



「おら、ブっかけてやる。身体中で受け止める」  
「いくよ、俺のザー汁直腸から飲み干して！」  
「や、ああああっつ!?あちゅ、うあああああッ！」  
「……ふう、だいぶ経験値たまったんじゃないか」  
「なんのだよ」

END

「うあ、あああッ!? な、に……、こいつら!?  
よる、な……! ああッ!?!」



しかし、魔物たちの触角は彼女の体中を這いずり回る。  
胸を弄び、秘裂を広げ、陰核を捏ねくり、肛門を解す様は  
愛撫のようで、思わず嬌声を上げる。

「ひあ……、あッ！それ……だ、め……えっ!?!」



すると、一本の触覚が大きく動き、尻穴に侵入する。

「な……、ああッ!?……うあ、はあ……あッ!?!」

突然の肛姦に悲鳴を上げるが、魔物の粘膜のせいで  
ヌルヌルと飲み込んでしまう。

「お、あ……ッ!?!うあッ……!は、あああッ!」





肛門の異物感に翻弄されていると、股間に痛みが走る。

「はう……ッ!?ぐ……、う……はあぁっ！」

二つの穴を抉られ、処女を魔物に奪われた痛みと屈辱に泣き叫ぶが、二本の触角は無情にも肉壁を擦り上げるのだった。




しばらく抽送を繰り返した後、肛門側を攻め立てる  
触角が動きを止める。

「……あ……っ！は、……あぁっ！」

ピストン運動が止まった拍子に、深呼吸していると、  
触角の先から魔物の幼体が注がれる。

「い……ひいッ!?な、にが……あぁぁぁッ!?やめ、  
くる、し……！」





しばらくして触角が肛門から引き抜かれる。

溢れ出した幼体が、尻穴から顔を出す。

「うあ……、は……っ！ ああ……うああっ」

幼体を追い出そうとしても、余計に飲み込んでしまう。

ふと、あぶれた幼体が目に入り、自分の腹の中で

蠢いている事を、強く意識してしまうのだった。

「……あ、……んあつ、……はあ……、あ」  
魔物が彼女を開放することはなく、未だに  
排泄器官を弄ばれながら、女性器を貫かれていた。



「ぎ……いッ!?や……あッ!?やめ、……れちや……っ!  
あ、……うあ!あああああああッ!?!」  
成長した幼体が飛び出すのを止められなかった。

ズンズン

ズンズン

ズンズン

ズンズン

ズンズン

ズンズン



「お……あッ!?はあ……ッ!こん……、な……っ!

やあ、は……!お、おおおッ!?

決壊したダムのように次々と飛び出す魔物たち。

だが彼女にはもう魔物に対する敵意や嫌悪感はなく、

連続で排泄し続けるような感覚に、溺れていた。



「……あ、まだ……ッ！おひ、……りっ、あ……  
へんに、へんに……なっちや、う……っ！」

排泄器官から産み落とす快楽に翻弄されていると、  
次の触角が伸びてきた。腹の魔物を出し切れば、  
また幼体を産み付けられるのだろうか。  
そんな事を考えていると、意識が遠のいていった。

がっ

はー！  
♡

お、お

はー！  
♡

お、お

がっ

がっ

がっ

がっ

がっ

END

「や……め！こんなの特訓と、違う……デス!?!」

「いいから俺達に任せとけて。立派なPTの肉べ……  
肉盾に鍛え上げてやっから、さっさと脱いで脱いで。  
お、結構いい身体してんじやん」

トキトキトキ

じゅんじゅん

んんん

びん

あはは

あはは





「ほらほら、ここでバックガードしないと！」

「ええっ!?!……あ、うあああああッ!?!」

「後ろばかり気を取られていると……」

「フロントがガラ空きだ、ぞ！」



「ひ、いいっ!?!いた……。あッ!?!うあ! 抜い、て……っ」

「お、初モノか! オイシイ依頼だったな!」

「うわ、痛そー。ほら、オッパイ揉んでやるよ。

ダメージ軽減ダメージ軽減」

「あっ! ……んあっ! やめ……デス……」



「ついでに、ココも鍛えとこうな！」

「うああッ!?!は……、ああッ!ひ……ああッ！」

「いいぞ、捏ねくとオマンコしまる！」

「ああ、ケツ穴吸い付いてくるぜ。

もう、出そう……だ！」



「あ、つ……うッ!?おひ……り、いっ!なに、か  
くる……っ!きちやう、デス……ッ!」

「こいつ、母乳吹き出しながらイッてるぜ」

「エロい体質しやがって、いく度に  
オマンコキュウキュウ絞めやがる。  
おら、こっちにも出してやるぞ!」



「やめ……る、デスッ!?セーし……、出したらっ!

赤ちや……んっ、できちやう、デス……っ!?!」

「馬鹿野郎!オートガードすんだ、よ!」

「無茶苦茶言ってるな」



「……あ、は……あッ!?……こん、な……!いっぱい……」

「こんなんじゃ壁役は程遠いぜ」

「まだまだ修行はこれからだからな。

明日もちゃんと来いよ」

「ふう……、う……っ!」



「は……あぁッ！……は、やく……！オマンコに、下さい……デスっ」

「……あれからほんとに毎日来るとはなあ」

「冒険なんかよりチンポの方が大好きだもんなー？」

「は、い……っ！アタ……シ、オチンポで、  
ずぶずぶされるの、気持ち、いい……デスっ！  
妊娠中でも、やすま……ず、頑張るデス……」



「よしよし、よく言った！……お前はもう一人前だ！」

「はは、これからは専属肉便器として毎日  
冒険に引き摺り回してやるから、な！」

「……あっ、は……あ！嬉し、い……デスっ！」

アタ、シ……はあッ♥いっぱい、……あうっ♥

使って、下さい……デス！」





「ああ、使ってやるぞ！おら、マンコ絞める！」

「ケツ穴閉じなく、してやるから……な！」

「……うあ……ッ！いっぱい、

出てる……デス♥アタ……シも

イッちゃ、……あああああッ♥」



END

「うああっ！離し、で……！こん……な、所で……っ

死に、たく……なっ……、ああッ!？」

迷宮に一人取り残された冒険者の声が響く。

すると懇願を聞き入れたかのようにツルが動きを止める。

ズル……

つた

つた

ツル



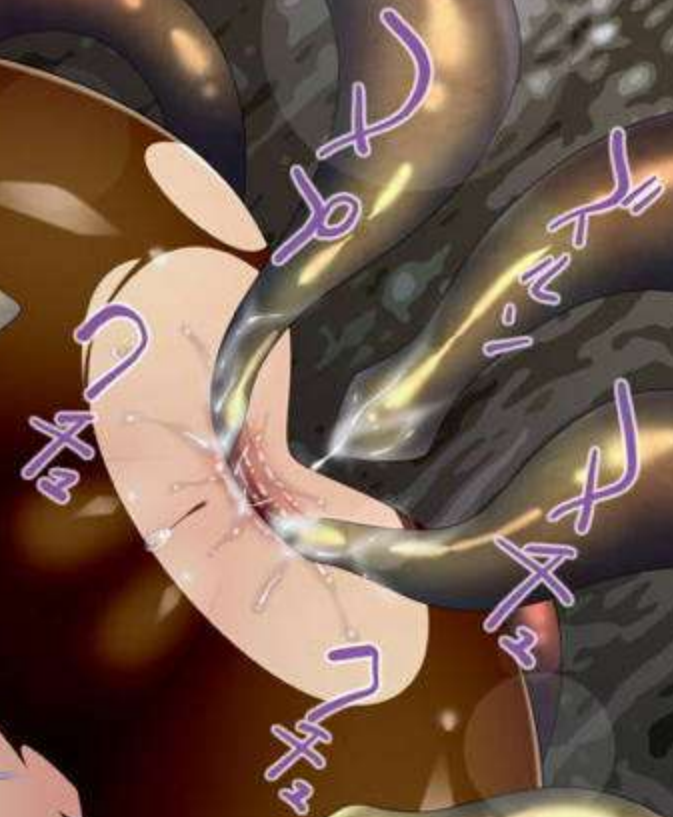
「な、……に？ひゃうっ……!?!」

ツルが再び動き出すと、肛門を舐りだした。

「ひっ……!?!や、め……あッ!?!」

尻穴に力を入れ押し出そうとするが、

無駄な抵抗であった。



「あ、うあ……！は、あああッ……！」

尻穴を穿られる感覚に声を漏らす。するとツルが奥へと入り込む。十分に解れた肉穴はそれを容易に受け入れた。

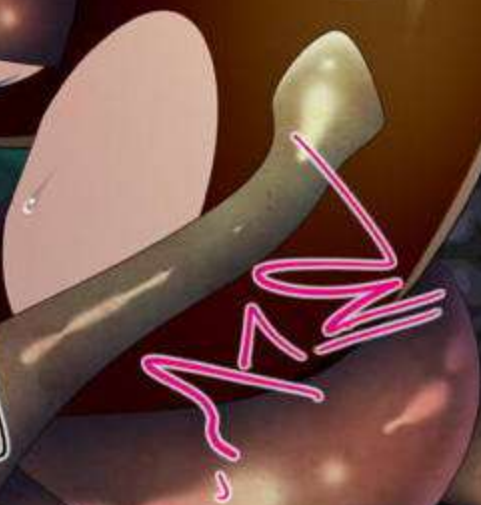
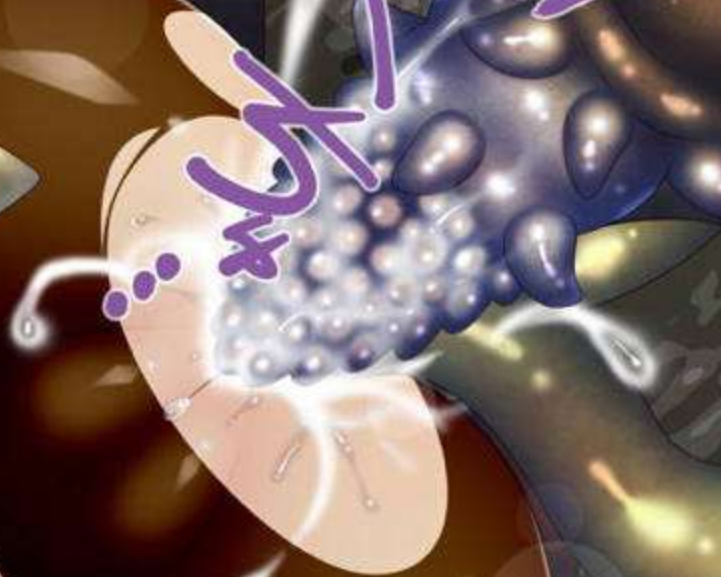
「は、あああッ……!?そ、な……あああッ!?!」



「はああ……ッ!?もう、許しっ……ひあ!?!」

秘裂に冷たいものを感じる。それは一際太いツルだった。

「まさ、か……あっ!?うあ……はああッ!?!」



そのツルが一気に肉壺の最奥へと進む。

「あ、……がっ!? いた……あうあッ!?!」

とどめを刺す気はないのかもと、どこかで期待していたが、  
激しい痛みで相手が魔物であったことを思い出す、



「ほう……っ！……ああッ！や、……ああッ！」

身体を貫く二本のツルが抽送し、肉壁を擦り上げる。

そして、子宮めがけて白い液体を放出した。

MM

あーッ

あーッ

MM

あーッ

あーッ

あーッ

「……あ、つ……ッ!?う、は……うッ!」

満足したのか、女性器からツルがゆっくりと引き抜かれた。

しかし肛門側は、未だにツルがぐねぐねと腸壁を擦る。

「はう……ん!も、……やめ……っ!や、す……ま……」

再び魔物に懇願するも、言い終えること無く意識を失った――





「……あ、う……!?あ……ああ……っ」

気がつくと、股間から草のようなものが生えていた。  
それは滑稽にも見えたが、腹から膣へと蠢く何かを  
身をもって感じており、それどころではなかった。



周りからツタが伸び、その草を搦め捕り強引に引っ張る。

「……ッあ!?やめ……ッ!?!い、ぎいゝゝゝゝゝ!!!?」

引き抜かれた魔物も叫び声を上げたが、痛みで上げた自身の声でかき消されていた。



「は……、……あッ!? うお、……んあッ!」

とうとう、魔物の全身が引き抜かれる。

しかしまだ、腹の中に魔物の存在を感じた。

「……あ、や……っ! ま、た……ッ、ク……る……」

彼女の受難はまだまだ続くようだ。



END























